

堤沼西Ⅲ遺跡

前橋市立桂萱東小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



1. 堤沼西Ⅲ遺跡出土の土器



2. 堤沼西Ⅲ遺跡発掘成果説明会風景

序

前橋市は、雄大な裾野を広げる赤城山を背に、坂東太郎として名高い利根川や詩情豊かな広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情にあふれた美しい県都です。

前橋市域は古代より豊かな文化があふれる地であり、東日本でも際だった内容を示しています。今から約2万8千年前の旧石器を始めとして、10基を数える国指定の古墳や関東の華とうたわれた前橋城に関するもの等、多くの文化財が残されています。

自然環境に恵まれたこの地では、古代からの人々の生活の跡が市内ほぼ全域にわたり残されています。古代の人々が暮らした家の跡や使用した石器や土器などの道具、水田跡なども多く、周辺の埋蔵文化財発掘調査によって多くの新しい知見が集積されています。

本発掘調査が行われた前橋市立桂萱東小学校の位置する堤町周辺は、赤城南麓の自然に恵まれた地であり、周辺では旧石器時代からの人々の生活の跡が残されています。小学校の校舎増築に伴い今年度発掘調査を行いました堤沼西Ⅲ遺跡では、奈良・平安時代の住居跡、鍛冶工房跡、掘立柱建物跡、溝跡、土坑、ピットなどを調査することができました。特に鍛冶工房跡と考えられる遺構は前橋市内では調査例が少なく、地域の歴史解明に資する貴重な資料を得ることができました。

発掘調査にあたり、ご理解とご協力を賜りました市関係部局、桂萱東小学校や地元関係者の方々、調査に従事されました皆様に感謝とお礼を申し上げます。本報告書が市史究明の一助となることを祈念して序といたします。

平成15年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長 阿部 明雄

例　　言

1. 本報告書は、前橋市立桂萱東小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、群馬県前橋市堤町450番地 2他に所在する。
3. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。
4. 発掘調査担当及び調査期間は次のとおりである。

発掘・整理担当者	平野岳志・小林和美（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）
発掘調査期間	平成14年10月9日～平成14年11月19日
整理・報告書作成期間	平成14年11月20日～平成15年3月20日
5. 本書の原稿執筆・編集は平野・小林が行った。
6. 発掘調査及び整理作業と図版の作成にかかわった方々は、次のとおりである。（五十音順）
秋元恵利子 浅野麗子 阿部シゲ子 井上和久 白田ふ志江 大澤敏子 神澤とし江
桐谷秀子 高橋 玲 奈良岩雄 橋本 茂 原田要三
7. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

凡　　例

1. 採図中に使用した北は、座標北である。
2. 採図には、国土地理院発行の1/50,000（前橋）を使用した。
3. 遺跡の略称は、14D 3である。
4. 検出した各遺構及び出土遺物の略記号は、次のとおりとした。

H…奈良・平安時代の堅穴住居跡、B…掘立柱建物跡、W…溝跡、
D…土坑、P…ピット、F…炉穴、S…石
5. 住居内のピットはP 1～P 4を主柱穴、P 5を貯蔵穴とし、P 6以降を補助柱穴とした。
また、住居内の床下土坑にはD 1、D 2、D 3…の名称を用いた。
6. 遺構・遺物実測図の縮尺は、次のとおりとした。

遺構　　住居跡、掘立柱建物、溝跡…1/50、1/60、1/100
土坑、ピット…1/60
調査区全体図…1/100
7. 図版中で使用したスクリーントーンは次のとおりである。

遺構断面図　構築面…

遺物実測図　施釉範囲… 須恵器断面…

8. 表中の数値の中で、（　）は現存地、〔　〕は復原値を表す。

目 次

	頁
序	i
例 言・凡 例	ii
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地	1
2 歴史的環境	3
III 調査方針と経過	
1 調査方針	4
2 調査の経過	8
IV 層 序	9
V 遺 構 と 遺 物	10
VI ま と め	12

写真図版

口絵1 堤沼西Ⅲ遺跡出土土器群	
2 堤沼西Ⅲ遺跡発掘成果説明会風景	
PL. 1 A区全景、H-1号住居跡、W-1号溝跡	
2 H-3号住居跡、H-4号鍛冶工房跡、B-1・2・3号掘立柱建物跡	
3 H-4号鍛冶工房跡、W-2・3・4号溝跡	
4 B区全景、B区土坑群、B-3号掘立柱建物跡、P-41~48号ピット	
5 H-1・3号住居跡出土の土器	
6 H-3住居跡出土・表探の土器	
7 石器・石製品、土製品・鉄製品	

挿 図

	頁
Fig. 1 堤沼西Ⅲ遺跡の位置及び周辺遺跡図	2
Fig. 2 堤沼西Ⅲ遺跡調査区設定図	5
Fig. 3 堤沼西Ⅲ遺跡全体図	7
Fig. 4 堤沼西Ⅲ遺跡調査経過図	8
Fig. 5 堤沼西Ⅲ遺跡基本層序説明図	9
Fig. 6 H-1住居跡	18
Fig. 7 H-2・3住居跡、P-41~48ピット	19
Fig. 8 H-4号鍛冶工房跡、W-1・2溝跡	20
Fig. 9 W-3・4・5溝跡	21
Fig. 10 B-1・2・3号掘立柱建物跡	22
Fig. 11 H-1・3号住居跡出土の土器	23
Fig. 12 H-3号住居跡出土、調査区表面採取の土器	24
Fig. 13 H-1・2・3・4号住居跡、W-3号溝跡、P-7ピットの出土遺物	25
Fig. 14 B-3号掘立柱建物跡出土、調査区グリッド採取・表面採取の遺物	26

表

Tab. 1 堤沼西Ⅲ遺跡周辺遺跡一覧表	2
Tab. 2 深穴住居・鍛冶工房跡一覧表	10
Tab. 3 掘立柱建物跡一覧表	10
Tab. 4 溝跡一覧表	10
Tab. 5 土坑一覧表	11
Tab. 6 ピット一覧表	11
Tab. 7 土器観察表	16
Tab. 8 石器・石製品・鉄製品観察表	17

I 調査に至る経緯

本調査地は前橋市堤町450番地2、前橋市立桂萱東小学校内に所在する。ここは、平成2年度に校庭拡張に伴うかけかえ道路建設に起因する埋蔵文化財発掘調査（沼西I遺跡）と桂萱東小学校プール建設に起因する発掘調査（沼西II遺跡）が行われており、遺跡地と認定されていた。

桂萱東小学校では、学区内の住宅団地建設による世帯増が見込まれるため、校舎増築の計画が持ち上がった。この事業に先立ち、平成14年度に埋蔵文化財発掘調査を実施する運びとなり、平成14年9月11日付けで前橋市長 萩原 弥慈治 より前橋市立桂萱東小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼が、前橋市教育委員会教育長宛に提出された。

前橋市教育委員会では、直ちに内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団（以下「調査団」という。）に対して調査実施を通知し、調査団はこれを受諾した。その後、調査団と調査依頼者（前橋市教育委員会総務課）とで協議・調整を図り、平成14年10月1日付けで、埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。

現地では、10月9日から掘削用重機を投入して発掘調査を開始した。なお、遺跡名称「堤沼西III遺跡」の「沼西」は、旧地籍の小字名を採用した。

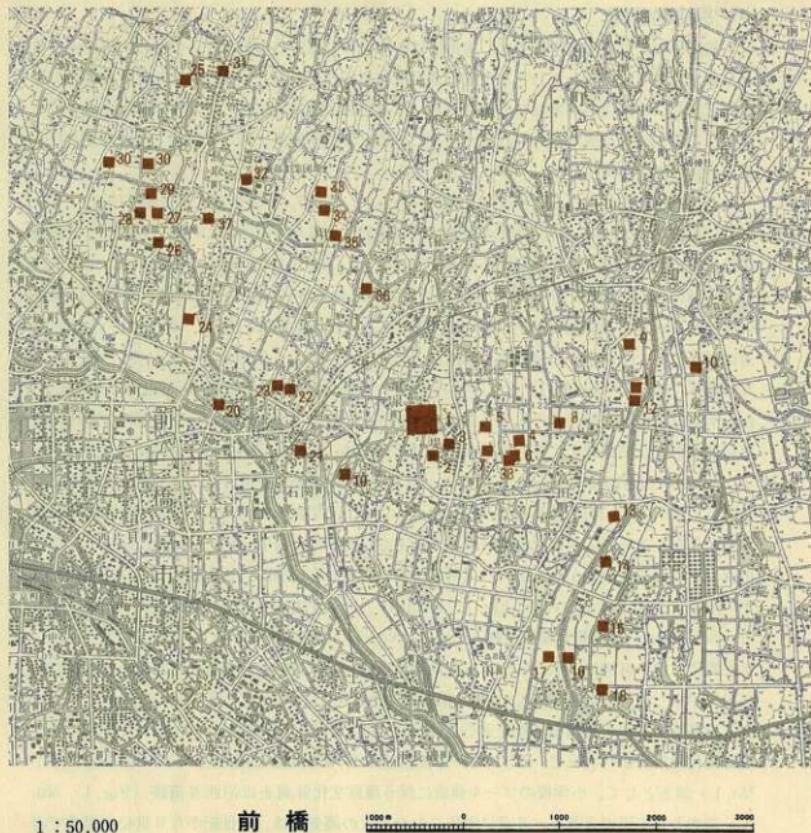
II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

本遺跡は前橋市街地から東方に6.2kmほど離れた堤町450番地2他に所在する。ここは、赤城山南麓の緩傾斜地で旧利根川の左岸にあたり、赤城山からの中小河川により開かれた谷に面した南北に長い舌状台地の上に位置する。東側には寺沢川が流れ、西側には堤沼を有する。遺跡地の北側には前橋大間々桐生線、南側には前橋赤堀線といった主要幹線道路が走っている。遺跡地の標高は約114mで、緩やかに南方向に傾斜している。

本遺跡地の立地する赤城山南麓地帯は丘陵性の台地と開折谷が入り組んだ複雑な地形を呈している。山頂部の小沼から流れ出す柏川をはじめ荒砥川、白川等が放射線状に流れ出し、更にこれらの川の間を中小の河川が枝状に流下する。こうした大小の河川は湧水とともに豊かな水利を恵むと同時に沖積地を形成してきている。

このように自然環境に恵まれた赤城山南麓には、各時代を通じて数多くの遺跡が残されている。ここは県内有数の遺跡が集中する地域であると言えよう。丘陵地は畑や集落が濃密に分布する居住地区であり、大小の河川によって複雑に絡み合って形成された谷地や低地部では水田耕作が行われてきた。標高の高い場所でも、谷の底部は水田開拓されている場合が多い。遺跡地は標高350~400mまでを上限とし、山麓を環状に取り巻いて分布している。本遺跡地周辺では、長年に渡り土地改良を始め住宅及び工業団地造成等の開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査により、数多くの遺跡が確認されている。



1 : 50,000

前 橋

1000 m 0 1000 2000 3000

Tab. 1 堤沼西III遺跡周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	概要	No.	遺跡名	概要
1	堤沼西I遺跡	平安住居	19	止野寺古墳	南方後円墳(全長約3m)
2	堤沼西II遺跡	奈良・平定住居	20	上野寺古墳	大坂城の北城(16世紀後半)
3	堤沼西III遺跡	奈良・平安住居、鐵冶工場、廻立柱建物	21	石塚古墳遺跡	中世の水作業用木樋
4	ロースタクン堤沼西III遺跡	奈良・平安住居	22	上野太郎三郎遺跡	鶴文館住居、平安住居
5	堤沼西IV遺跡	奈良・平安住居	23	桑原遺跡	FAB下木路、住居
6	ロースタクン堤沼西IV遺跡	奈良・平安住居、鐵冶工場	24	大山崎古墳	円墳(約30m)
7	ロースタクン堤沼西V遺跡	奈良・平安住居、廻立柱建物	25	方井原遺跡	鶴文館、廻立柱住居、古墳
8	御殿山古墳	円墳(S.9号墳)、鐵、刀、舞、金環	26	方井原西面遺跡	鶴文館住居、配石
9	大胡5・6号墳	円墳、歌枕式石室	27	西山遺跡	鶴文館住居、古墳
10	東川谷遺跡	鐵文住居、古墳住居、火葬	28	古井遺跡	古生中・後住居
11	福岡丘遺跡	鐵文住居、古墳遺跡、火葬、古洪溝	29	九重遺跡	鶴文館石作石証、古墳住居
12	麻田の宝塔	奈良町地圖、中島を代表する石建物	30	小野明道跡	奈良・平安住居
13	おとうむら古墳	円墳(S.54号墳、29-m.)	31	芳賀北部遺跡	鶴文館、中住居、奈良・平安住居
14	東筑前田遺跡	鐵文・吉墳、奈良・平安住居	32	芳賀東部遺跡	鶴文館、後住居、古墳
15	丸山遺跡	佐生住居、平安住居	33	上野地名II遺跡	古墳住居
16	東筑前東部遺跡	鐵文住居、奈良・平安住居	34	神奈遺跡	古墳住居、奈良・平安住居、奈良・二彩
17	少許復古墳	前田方圓墳(全長30m)	35	猪之塚古墳	円墳(直径7.5m.)
18	東筑前二木塚遺跡	川石器、鶴文住居、佐生・古墳住居	36	新田古墳	円墳(直径9m.、7.5m.)
			37	丹波坂藏寺上遺跡	田畠、高1.6m.、古墳、奈良・平安住居、鐵冶工場、鋸切工場
			38	宮代下大日遺跡	川石器、鶴文住居、古墳、奈良・平安住居、鐵冶工場

Fig. 1 堤沼西III遺跡の位置及び周辺遺跡図

2 歴史的環境

本遺跡地周辺は農地利用が主で、集落は比較的少ない地区であった。そのため、耕作土・覆土とも比較的厚く堆積しており、造構の遺存度は良好といえる。しかし、近年、学校建設や萱野団地建設に伴い住宅が増加してきている。本遺跡発掘調査の期間中も、遺跡地東の谷地でローゼタウン住宅団地造成が進められていた。このような開発事業に伴って埋蔵文化財調査が行われ、地域の歴史に関するデータが収集されてきた。

旧石器時代の資料は、鳥取福蔵寺II遺跡 (Fig. 1 No.37) や富田下大日遺跡 (Fig. 1 No.38) で確認されている。縄文時代の遺跡は、台地部に集落が確認されている。しかし、その規模はまちまちである【芳賀北部団地遺跡 (Fig. 1 No.31)、芳賀東部団地遺跡 (Fig. 1 No.32)、芳賀西部団地遺跡 (Fig. 1 No.26)、芳賀北曲輪遺跡 (Fig. 1 No.25)、泉沢谷津遺跡 (Fig. 1 No.10)、稻荷前遺跡 (Fig. 1 No.11)、荒砥宮田遺跡 (Fig. 1 No.14)、荒砥北原遺跡 (Fig. 1 No.16)、上泉太郎三前遺跡 (Fig. 1 No.22)、西田遺跡 (Fig. 1 No.27)、九料遺跡 (Fig. 1 No.29)】。弥生時代の遺跡は、荒砥川流域の一部を除き確認されていないが、小規模な低湿地周辺で今後発見される可能性がある。古墳時代には、集落が縄文時代の集落範囲を拡大して台地上に展開されている【萱野遺跡 (Fig. 1 No.3)、荒砥宮田遺跡 (Fig. 1 No.14)、九料遺跡 (Fig. 1 No.29)、芳賀東部団地遺跡 (Fig. 1 No.32)、五代檜峯II遺跡 (Fig. 1 No.33)、檜峯遺跡 (Fig. 1 No.34)】。古墳については、集落の周辺部に後期古墳が分布している。6世紀前半の構築と推定される正円寺古墳 (Fig. 1 No.19) 等、荒砥川流域を中心に群集墳が形成される【御殿山古墳 (Fig. 1 No.8)、大胡5・6号古墳 (Fig. 1 No.9)、おとうか山古墳 (Fig. 1 No.13)、少将塚古墳 (Fig. 1 No.17)、大日塚古墳 (Fig. 1 No.24)、芳賀北曲輪遺跡 (Fig. 1 No.25)、西田遺跡 (Fig. 1 No.27)】。奈良・平安時代には、可耕地の拡大に伴って集落範囲が拡大し、遺跡の分布も広範囲にわたる。奈良三彩を出土した檜峯遺跡 (Fig. 1 No.34) もこれにあたる。

本遺跡地を有する前橋市立桂萱東小学校校庭では、平成3年に校庭拡張とプール建設に伴う埋蔵文化財調査が行われている。学校の校庭拡張に伴う埋蔵文化財調査は沼西I遺跡 (Fig. 1 No.1) 調査として、小学校のプール建設に伴う埋蔵文化財調査は沼西II遺跡 (Fig. 1 No.1) 調査として平成3年1~3月に実施された。この調査では、8世紀から9世紀中頃までの竪穴住居跡が合わせて10軒確認された。

本遺跡地南東400~500mの舌状台地上には萱野団地がある。ここは、約50,000m²の住宅団地造成に先立って群馬県企業局による埋蔵文化財調査が実施され、萱野団地遺跡 (Fig. 1 No.3) と命名されている。昭和60年、61年にわたる調査では、横穴式石室をもつ古墳1基、縄文時代から平安時代までの竪穴式住居跡30軒以上が確認された。

平成11年度からは、ローゼタウン住宅団地造成に伴う埋蔵文化財調査が開始された。本遺跡地の東に隣接する堤沼の南側では、平成11年度に堤沼下遺跡 (Fig. 1 No.2) の調査が行われた。この調査では、縄文時代の土坑1基、土器片486点、石器29点、奈良・平安時代の住居跡3軒、竪穴状造構1軒、掘立柱建物跡1等、時期不明の土坑283基、柱穴96基、風倒木痕54ヶ所、井戸跡12ヶ所、溝状遺構15ヶ所が確認された。また、畦畔確認には至らなかったものの浅間B軽石で覆われた水田跡の一部が見つかり、プランツオーパール分析から稲作の可能性が確認された。

萱野住宅団地の東側には谷地沼がある。この沼を挟んで更に東側の舌状台地でもローゼタウ

ン住宅団地の造成が予定されている。この台地は、平成12・13年度にローズタウン遺跡群として4つの遺跡が調査された。平成12年度に調査された富田下大日I遺跡（Fig. 1 No. 4）では、縄文時代の住居跡1軒、奈良・平安時代の住居跡16軒、掘立柱建物跡10棟、時代不明の土坑21基が確認された。これらの遺構からは、土師器・須恵器・灰釉陶器・石器・石製品等の遺物を収納した。同年度に調査された富田下大日II遺跡（Fig. 1 No. 5）では、縄文時代の住居跡4軒、奈良・平安時代の住居跡3軒、掘立柱建物跡3棟、竪穴状造構1軒、時期不明の土坑27基、ピット98基、風倒木痕7ヶ所が確認された。住居跡や掘立柱建物跡では、縄文土器・石器・土師器・須恵器・墨書き土器・刻書き土器・鉄製品等の遺物が出土した。

平成13年度に調査された富田下大日III遺跡（Fig. 1 No. 6）では、縄文時代の住居跡5軒、奈良・平安時代の住居跡10軒、竪穴状造構1軒、掘立柱建物跡12棟、土坑100基、ピット73基が確認された。土師器・須恵器・灰釉陶器・石器・石製品・鉄製品等多くの遺物があったが、西暦818～834年にかけて鋳造された皇朝十二銭銭貨「富壽神寶」が確認され、9世紀代この遺跡地での人々の生活が窺われた。同じく13年度には富田下大日IV遺跡（Fig. 1 No. 7）も調査された。この調査では、縄文時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡2基、溝状造構1条、土坑66基、ピット930基が確認され、縄文土器・石器・土師器・須恵器・鉄製品・砥石・鐵滓・羽口等の遺物が出土した。

III 発掘調査の方針と経過

1 調査方針

調査に先駆け調査班以前体を網羅する4mグリッドを設定し、これを最小単位とした。グリッドは西から東へX1、X2、X3…、北から南へY1、Y2、Y3…と付番し、グリッドの呼称は北西交点の名称を使用した。

堤沼Ⅲ遺跡のX104-Y104の公共座標は

【世界測地系】 第IX系座標：44339.311(X) -63066.821(Y)

緯 度：北緯36° 23' 51" 2088 経 度：東経139° 07' 48" 9092

子午線収差角：24' 55" 0 増大率：0.999949

【日本測地系】 第IX系座標：43984.000(X) -62774.000(Y)

緯 度：北緯36° 23' 39" 9006 経 度：東経139° 08' 00" 4611

子午線収差角：24' 55" 0 増大率：0.999949

調査は、表土除去→遺構確認→杭打設→遺構掘下げ→遺構精査→測量→全景写真撮影の手順で進めることを原則とした。

図面は、平板簡易造り方測量を用い、住居跡や掘立柱建物跡等の遺構は1/20、住居跡の竪は1/10の縮尺で作成した。遺構の遺物については、平面分布図を作成し、遺物台帳に各種記録を記載しながら収納した。

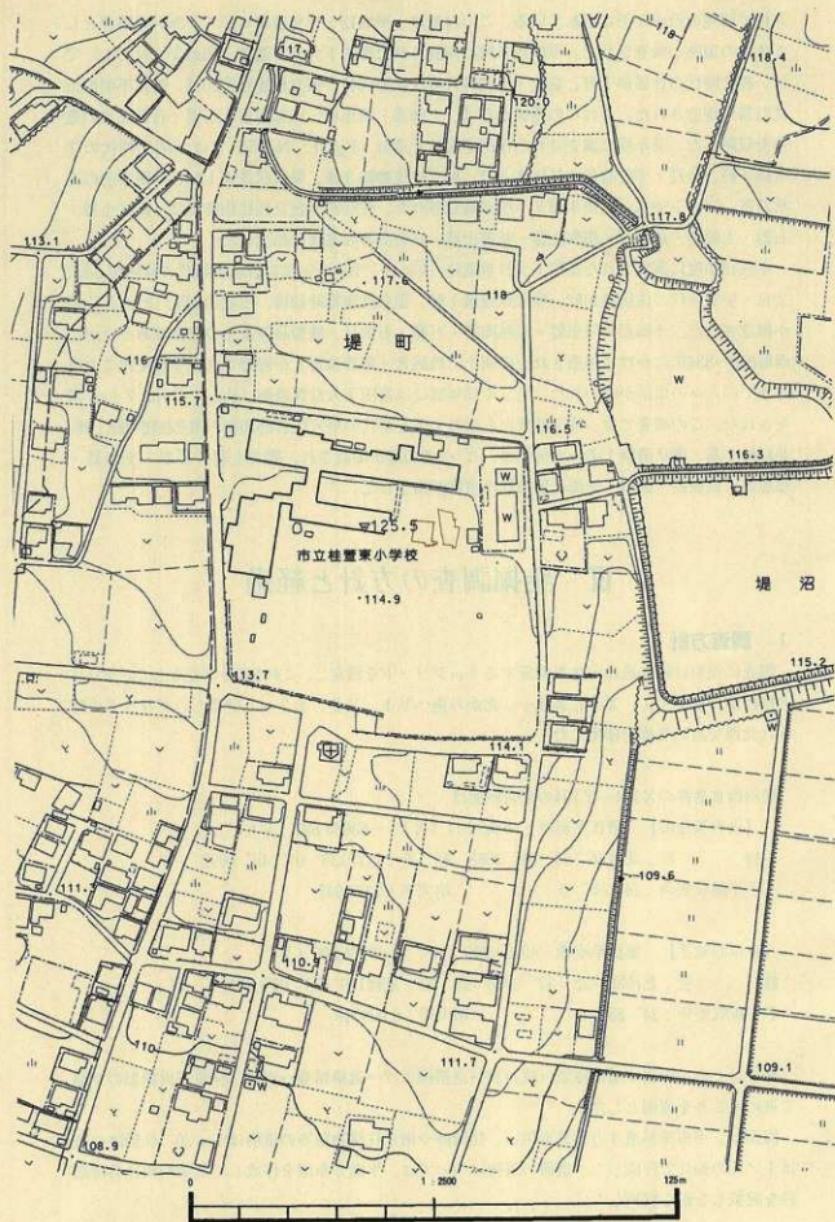


Fig. 2 堤沼西町遺跡調査区設定図

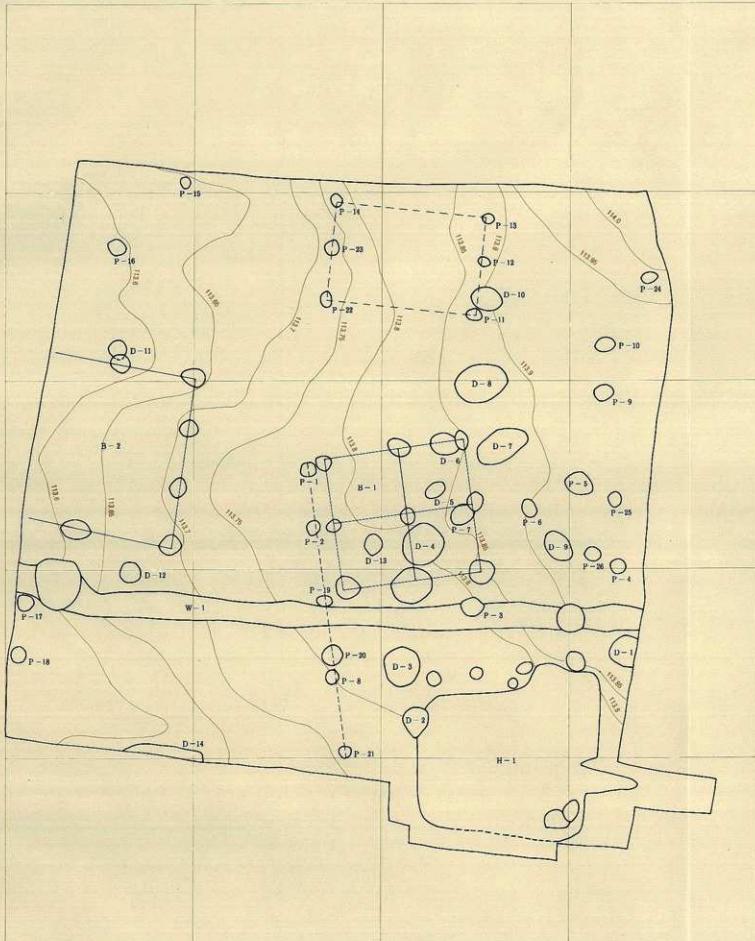
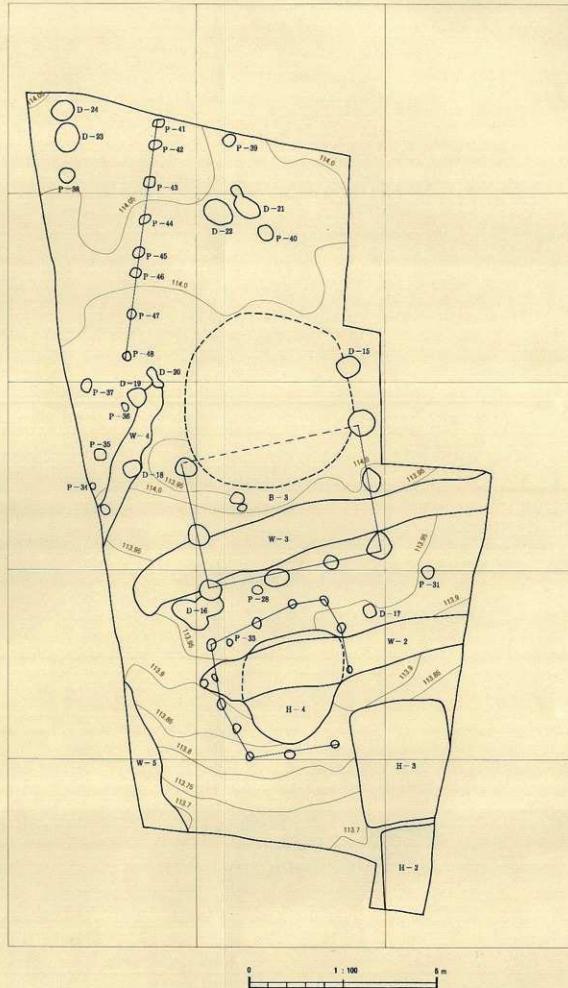


Fig. 3 塘沼西面遺跡全体図



2 調査の経過

調査地が小学校内であることから、児童の安全には万全を期して調査区を設定した。調査区周辺に安全帯を設置するとともに、排土場所と調査工程に配慮した。その結果、調査地を二つに分けて、切り返しで全体の調査をすることとなった。便宜上、前半部分をA区、後半部分をB区とした。調査面積はA・B区合わせて510m²である。

調査は、同年10月9日の表土除去からはじまった。0.4立米パケットの掘削用重機を使用して調査区西半分のA区から表土を除去し、遺構を確認していく。翌9日には、現場事務所を開設して機材を搬入し、調査は本格的に稼働を始めた。A区の表土除去は11日に、遺構の確認作業も17日には終了した。翌18日からは、遺構の掘下げや写真撮影を開始した。

10月第4週の23・24日には、調査区に方眼杭とBM杭を打設した。これらの杭を基準に、この週から遺構の測量作業も始まった。10月最終週の28日には、各遺構の掘下げ・測量・写真撮影がすべて終わり、翌29日にはA区の全体写真撮影を行った。

B区の表土除去及び遺構の確認作業は30・31日の二日間で終了した。11月に入ると、B区の調査が本格化し、6日にはB区の杭を打設した。そして同日の午後、桂萱東小学校の職員を対象に発掘調査の体験研修が開催された。各遺構の掘下げ・測量・写真撮影は15日までに終了し、同日にB区の全体写真を撮影した。

本発掘調査が小学校の敷地内で行われたことから、文化財普及活動と学校の教育課程との連携を考え、発掘調査成果説明会を11月18日に開催した。対象は5・6年生である。教育委員会文化財保護課の井上文化財整備指導員を講師に、講話と遺跡の見学を行った。

発掘調査成果説明会後の19日、現場事務所を撤去し、発掘機材と出土品を文化財保護課内の整理作業室に搬出して、平成15年3月20日まで遺物の整理作業と報告書作成を行った。

調査区の埋め戻しは11月25日から始まった。しかし、運動場としての復旧が必要であったため、埋め戻した土が落ち着くのを待って再度填圧し、ゴンベ砂を敷き詰める工事を行った。最終的に埋め戻しが完了したのは平成15年1月7日であった。

	10月	11月	12月	1月
表 土 除 去	■	■		
遺 構 確 認	■	■	■	
杭 打 設	■	■		
遺 構 掘 下 ・ 精 査	■	■	■	
測 量 ・ 図 面 作 成	■	■	■	
写 真 撮 影	■	■	■	
調 査 成 果 説 明 会			■	■
埋 戻 し ・ 現 状 復 旧			■	■

Fig. 4 堤沼西Ⅲ遺跡発掘調査経過図

IV 層序

遺跡地区内X105・Y104グリッドの土層を基にして、本遺跡の標準土層を作成した。土層の堆積状況は、「Fig. 4 提沼西Ⅲ遺跡基本層序説明図」に示したとおりである。

		(cm)	
I		0	表 土 校庭造成のために踏み固められて、固く締る。
II	17	第1層	暗褐色土層 ローム粒を10%、C軽石・FP軽石を5%、焼土粒・炭化物を僅かに含む。粘性はなく、固く締る。
III	31	第2層	黒褐色土層 C軽石を20%、FP軽石・ローム粒を10%、炭化物を僅かに含む。粘性があり、締まりは弱い。
IV	56	第3層	褐色土層 ロー粒を10%、C軽石を5%含む。弱い粘性があり、締まりは弱い。
V	71	第4層	黄褐色土層 ソフトローム層。粘性・締まりともある。
VI	80	第5層	明黄褐色土層 ハードローム層。粘性・締まりともある。
	146		

Fig. 5 提沼西Ⅲ遺跡基本層序説明図

V 遺構と遺物

1 住居跡・鍛冶工房跡

奈良・平安時代の所産と想定される住居跡等4軒検出。Tab. 2 参照

Tab. 2 壓穴住居跡・鍛冶工房跡一覧表

番号	住居跡名	Fig.	PL	位 置	長軸方位	規 模 長軸×短軸×壁高 (m) (m) (m)	形 状	毫 等	遺物数 (点)	備 考
1	H-1	6	1	X104~105, Y104~106G	N-77° -W	4.81×4.64×6.5	長方形。北邊東側に張出し部。	東壁南寄りに付設。	384	D-2に新られる。8世紀中~末頃と比定。
2	H-2	7	-	X105, Y105~106G	N-89° -W	1.49×1.05×2.3	方形と想定。 南西隅部分のみ検出。	調査区外と想定。	38	時期不明
3	H-3	7	2	X107~108, Y105 G	N-0°	3.21×2.82×34.2	方形と想定。 南東隅は調査区外。	調査区外。 竪掛け部分のみ検出。	340	9世紀後半と比定。
4	H-4	8	2,3	X107, Y104~105G	N-76° -E	2.75×2.73×5.9	不正形。	壁なし。鍛冶炉址を西側で検出。	1	9世紀に新られる。 鍛冶工房跡。9世紀前半と比定。

2 掘立柱建物跡

奈良・平安時代の所産と想定される掘立柱建物跡3棟検出。Tab. 3 参照

Tab. 3 掘立柱建物跡一覧表

造構名	Fig.	PL	位 置	長軸方向	規 模 長軸×短軸(m) 柱頭(m) 圍頭(m)	柱 穴 長径(cm)×短径(cm)×深さ(cm)から求さ(cm)	出 土 遺 物 数	備 考
B-1	10	2	X103~104-Y103~104G	N-81° -E	3.7×3.5 1.8 12.95	P ₁ : 41×40×22 P ₂ : 44×40×40 P ₃ : 37×65×37 P ₁ : 104×92×33 P ₂ : 37×64×35 P ₃ : 44×45×30 P ₄ : 37×37×35 P ₅ : 55×49×69 P ₆ : 38×37×25	8 点	柱立柱跡。 D-6を新る。
B-2	10	2	X101~108-Y108~104G	N-13° -E	4.5×2.3 2.38±0.15 10.35	P ₁ : 53×45×19 P ₂ : 22×53×46 P ₃ : 52×48×48 P ₄ : 60×45×36 P ₅ : 22×43×33 P ₆ : 63×53×35	-	D-11を新る。 西側は調査区外のため調査できず。
B-3	10	4	X106~108-Y103~104G	N-77° -E	4.75×3.3 1.55 15.68	P ₁ : 70×52×25 P ₂ : 56×50×47 P ₃ : 73×61×49 P ₄ : 76×56×38 P ₅ : 54×50×34 P ₆ : 86×63×27 P ₇ : 66×56×17 P ₈ : 62×61×17	26 点	W-3とD-15を新る。

3 溝 跡

5条検出。Tab. 4 参照

Tab. 4 溝跡一覧表

番号	溝跡名	Fig.	PL	位 置	長軸方位	規 模 幅×最大深度×壁厚 (m) (m) (m)	共 さ (m)	遺物数 (点)	備 考
1	W-1	8	1	X101~106, Y104 G	N-87° -W	16.6×60×49	16.6	5	横断面は、すき抜形。P-3に新られる。
2	W-2	8	3	X106~108, Y104~105 G	N-77° -E	26.1×130×78	7.35	73	横断面は、連台円形。H-4に新される。
3	W-3	9	3	X106~108, Y103~104 G	N-75° -E	42.7×183×94	10	80	横断面は、連台円形。B-3に新される。
4	W-4	9	3	X106 , Y102~104 G	N-23° -E	14.5×71×41	4.3	26	横断面は、U字形。D-15, D-19, D-20に新される。
5	W-5	9	-	X106 , Y104~105 G	N-15° -W	36×120×50	4.2	20	横断面は、U字形。

4 土坑

24基検出。Tab. 5 参照。

Tab. 5 土坑一覧表

遺構名	位 置	形状等	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物数 (点)	時期	そ の 他
D-1	X105 Y104 G	楕円形 (東側突出部)	89	71	56	—	不明	
D-2	X104 Y105 G	不整形	125	88	24	—	不明	H-1を斬る。
D-3	X104 Y104 G	楕円形	115	100	53	—	不明	
D-4	X104 Y103~104 G	円形	110	104	39	—	不明	
D-5	X104 Y103 G	不整形	50	34	29	—	不明	
D-6	X104 Y103 G	楕円形	77	54	40	—	不明	B-1に斬られる。
D-7	X104 Y103 G	楕円形	153	66	41	—	不明	
D-8	X104 Y102~103 G	楕円形	125	100	22	—	不明	
D-9	X105 Y104 G	楕円形	90	72	35	—	不明	
D-10	X104 Y102 G	楕円形	85	61	33	—	不明	
D-11	X102 Y102 G	円形	50	45	14	—	不明	B-2に斬られる。
D-12	X102 Y104 G	円形	55	52	25	—	不明	
D-13	X103 Y104 G	円形	49	48	26	—	不明	
D-14	X102 Y105 G	不整形	170	33	45	—	不明	
D-15	X107 Y102 G	楕円形	72	56	46	—	不明	
D-16	X106~107 Y104 G	不整形	136	90	35	—	不明	B-3に斬られる。
D-17	X108 Y104 G	円形	49	45	27	—	不明	
D-18	X106 Y103 G	楕円形	51	44	41	—	不明	W-4を斬る。
D-19	X106 Y103 G	楕円形	63	55	17	—	不明	W-4を斬る。
D-20	X106 Y102 G	不整形	52	30	20	—	不明	W-4を斬る。
D-21	X107 Y101 G	不整形	97	60	28	—	不明	
D-22	X107 Y101 G	楕円形	78	65	24	—	不明	
D-23	X106 Y101 G	円形	70	65	23	—	不明	
D-24	X106 Y101 G	円形	63	59	24	—	不明	

5 ピット

48基検出。Tab. 6 参照

Tab. 6 ピット一覧表

遺構名	位 置	形状等	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物数 (点)	時期	そ の 他
P-1	X103 Y103 G	円形	43	42	20	—	不明	
P-2	X103 Y103 G	円形	40	37	23	—	不明	
P-3	X104 Y104 G	円形	58	54	20	—	不明	W-1を斬る。
P-4	X105 Y104 G	円形	37	33	18	—	不明	
P-5	X105 Y103 G	楕円形	68	57	52	—	不明	
P-6	X104 Y103 G	円形	45	42	27	—	不明	
P-7	X104 Y103 G	楕円形	58	48	35	—	不明	
P-8	X103 Y104 G	円形	41	38	38	—	不明	
P-9	X105 Y103 G	円形	58	50	18	—	不明	
P-10	X105 Y102 G	円形	51	49	39	—	不明	
P-11	X104 Y102 G	円形	31	31	20	—	不明	
P-12	X104 Y102 G	楕円形	35	30	35	—	不明	
P-13	X104 Y101 G	円形	31	29	14	—	不明	
P-14	X103 Y101 G	楕円形	34	26	19	—	不明	
P-15	X102 Y101 G	楕円形	31	24	48	—	不明	
P-16	X102 Y102 G	円形	45	44	31	—	不明	

遺構名	位 置	形状等	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土物数 (点)	時期	そ の 他
P-17	X101 Y104 G	円 形	47	45	22	-	不明	
P-18	X101 Y104 G	円 形	37	36	21	-	不明	
P-19	X103 Y104 G	楕 円 形	35	29	36	-	不明	
P-20	X103 Y104 G	楕 円 形	57	50	31	-	不明	
P-21	X103 Y105 G	円 形	36	34	21	-	不明	
P-22	X103 Y105 G	円 形	34	32	24	-	不明	
P-23	X103 Y102 G	円 形	39	37	22	-	不明	
P-24	X105 Y102 G	楕 円 形	37	28	11	-	不明	
P-25	X105 Y103 G	円 形	41	40	42	-	不明	
P-26	X105 Y104 G	円 形	50	46	35	-	不明	
P-27	X105 Y102 G	円 形	30	28	23	-	不明	
P-28	X107 Y104 G	円 形	36	32	24	-	不明	
P-29	X107 Y103 G	円 形	30	30	17	-	不明	
P-30	X107 Y103 G	円 形	33	30	31	-	不明	
P-31	X108 Y104 G	楕 円 形	34	27	18	-	不明	
P-32	X107 Y104 G	円 形	26	25	23	-	不明	
P-33	X107 Y104 G	円 形	19	18	24	-	不明	
P-34	X106 Y103 G	円 形	20	16	19	-	不明	
P-35	X106 Y103 G	円 形	35	35	17	-	不明	
P-36	X106 Y103 G	楕 円 形	23	16	25	-	不明	
P-37	X106 Y102~103 G	円 形	31	31	11	-	不明	
P-38	X106 Y101 G	円 形	45	42	18	-	不明	
P-39	X107 Y101 G	円 形	35	33	20	-	不明	
P-40	X107 Y101~102 G	円 形	42	38	42	-	不明	
P-41	X106 Y101 G	円 形	30	29	12	-	不明	
P-42	X106 Y101 G	円 形	32	30	15	-	不明	
P-43	X106 Y101 G	円 形	29	27	17	-	不明	
P-44	X106 Y101 G	円 形	28	26	15	-	不明	
P-45	X106 Y102 G	円 形	30	27	16	-	不明	
P-46	X106 Y102 G	円 形	28	27	12	-	不明	
P-47	X106 Y102 G	円 形	26	26	10	-	不明	
P-48	X106 Y102 G	円 形	28	23	10	-	不明	

VI まとめ

本遺跡地は、寺沢川の左岸にある丘陵地の東斜面に位置する。この丘陵地は南に向かって緩やかに傾斜している。遺跡地から100m余り東には堤沼があり、その南側には広く開けた水田が続いている。今回の調査は限られた範囲であったが、奈良・平安時代では住居跡3軒、鍛冶工房跡1軒、掘立柱建物跡3棟を検出した。時期不明のものでは、溝状造構5条、土坑24基、ピット48基を検出した。このうち、P-41・42・43・44・45・46・47・48号ピットとP-1・2・19・8・21号ピットは、柵列である可能性があった。また、P-11・12・13・14・22・23号ピットは、掘立柱建物跡である可能性があったが、掘り込まれた深さがまちまちで掘立柱建物と判断するにいたらなかった。

竈をもつ住居跡から出土した遺物は、土師器片（壺・楕・甕など）が最も多く、ついで須恵

器片（坏・楕・甕など）であった。そのほか少數の出土であったが灰釉陶器片、石器・石製品、鉄製品、縄文土器片も確認することができた。

平成3年に本遺跡地から100mほど南では沼西遺跡が、10m東では沼西II遺跡が調査された。この2遺跡はどちらも集落跡で、沼西遺跡では9世紀中頃と推定される住居跡が6軒、沼西II遺跡では8世紀代と推定される住居跡が2軒、9世紀中頃と推定される住居跡2軒確認されている。本遺跡は、これらと同一の集落に属するものと見られる。遺構の時期は遺物から、H-1号が8世紀中頃から末期、H-2号が8世紀末期、H-3号が9世紀後半、H-4号が8世紀末に比定される。このように、調査では集落の内容解明のための資料が集積され、本遺跡は8世紀から9世紀にかけての集落であると考えられる。

縄文土器片は、H-1号住居跡の埋没土中から縄文時代前期と推定されるものを確認した。また、遺構確認面でも調査区表採で縄文土器片や石器・石製品を確認した。しかし、遺物散布地に筋堀を入れて確認したが、縄文時代の遺構の検出には至らなかった。

H-4号遺構について

本年度調査では、鍛冶工房跡を確認することができた。このような遺構は、前橋市内では調査例が少なく、貴重な資料となった。そこで、以下、H-4号住居跡鍛冶工房を別途に取り上げて、成果をまとめてみたい。

1 所 在

B区の南側で、沼西II遺跡と隣接する調査区東端に位置する。遺構の東端部は調査区外のため調査できなかった。しかし、同時期と推定される沼西II遺跡のH-3号住居跡に近く、一般的の堅穴住居群の存在する集落の中で検出された。

2 遺構

本遺構は他の住居跡とは異なる様相を見せ、遺構中からは多くの鉄滓、羽口片、鍛造飛沫が確認されたことによって、遺構の性格を鍛冶工房とした。

堅穴は台形に近い不整形の掘り方をもち、北側の大部分を後世のW-2号溝によって壊されている。しかし、掘り方の範囲は明確であり、その規模は東西長2.75m、南北長2.73mを測る。遺構確認面からの深さは壊されている部分もありまちまちだが、平均8.9cmの遺存である。堅穴の中では、明らかな柱穴は確認できなかった。しかし、壁の外に遺構を取り囲むように合計11基のピットが検出された。これらピットの状況から、本遺構は一般的の堅穴住居と異なってかなり上屋が高くなる特殊な構造であることが想定できる。多量の熱を発する鍛冶工房特有の火災への配慮がうかがわれる構造であると言えよう。

堅穴の中では柱穴は検出できなかったものの、中央東よりに楕円形廐棄穴、鉄床石が検出された。また、西側半分には炉址、炭置き穴、長方形の廐棄穴が確認された。

炉址は西半部中央にあり、長径40cm、短径33cmの楕円形を呈していた。掘り方は楕底状で、床面から最深部まで7~10cmほどであった。底部付近は赤く焼けたローム層が確認された。その上に還元されるまで強く青色に焼けた粘土を貼付けた部分があり、この炉が高温で操業されたことを裏付けている。炉の西側に東西に長い長方形の掘り方があり、羽口挿入口と推定される。

廐棄穴は2か所で確認された。一つは、遺構中央東よりで南北長57cm、東西長43cmの楕円形

を呈し、床面からの深さは約30cm (P₁)。もう一つは北西隅で南北長56cm、東西長77cmの長方形を呈し、床面からの深さ約28cm (P₂) であった。これらの穴からは鉄滓、羽口片、鍛造飛沫が多量に出土した。

炉址の北側には隣接して多量の炭化物を含む穴が確認された。掘り方のローム土には火を受けた様子がないことから、炉にくべる炭を一時的に置く炭置き穴であると考えられる。

廐棄穴 (P₁) 真上の覆土中から、川原石が出土した。この石は長径95cm×短径62cm×厚さ20cmほどの大きさで、平らな面を上にして出土し、表面はかなり摩耗していた。大きさや表面の状態から、鉄床石と考えられる。本来、炉に近い南側に据えられていたであろうが、恐らく遺構埋没の際にずり落ちたものと推察される。

3 出土遺物

羽口片 小礫や砂を含む良質とは言えない胎土でつくられている。そのため、ほとんどが小片に割れて検出された。その数は、小さなかけらまで数えると86点に及ぶ。しかし、表面に鉄滓が付着した大きな破片もあり、風を送る空気の通り道を確認することができた。(Fig.13, PL. 7)

土器片 青海波状文をもつ須恵器甕の土器片を確認した。しかし、これ以外に土器を確認することはできなかった。

製鉄関連遺物 鍛造飛沫の他に、多量の鉄滓が確認できた。鉄滓は2~11cm大で、出土総量は約7kgに及んだ。

4 まとめ

以上見てきたように本遺構は製鉄工房跡である。その性格は鍛冶遺構として規定されよう。しかし、出土遺物に多量の鉄滓を含むことからすると、二次精錬的な作業も合わせて行っていた可能性もある。

- (1) 掘り方が不正形であるが、外部柱穴から見るとかなり上屋が高くなる構造と見られる。
- (2) 一般の住居と異なって、床面が平坦でない上に竈も付設されていない。このことは工房としての特徴を示している。
- (3) 本遺構は周囲の遺構との関係や出土遺物から9世紀前半のものと推定される。県内の同種遺構も9世紀段階のものが多い。この時期には製鉄がかなり普及し、精錬・鍛造の過程が一般化したことが想定される。この中で、一か所で集中して精錬を行って原料鉄を得て、それを周辺の集落に供給して鍛造、製品化するという組織が既に出来上がっていたと見られる。そうした当時の社会状況を反映している遺構とみられる。

《主要参考文献及び引用文献》

- 「前橋市史 第1巻」 前橋市史編さん委員会 1971
- 「日本土器事典」 大川 清・鈴木公雄・工楽普通 1996
- 「ローズタウン遺跡群堤沼下遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1999
- 「ローズタウン遺跡群富田下大日I遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000
- 「ローズタウン遺跡群富田下大日II遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000
- 「ローズタウン遺跡群富田下大日III遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2001
- 「ローズタウン遺跡群富田下大日IV遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2001
- 「田口八幡I遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000
- 「田口八幡II遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000
- 「萱野・下田中・矢場遺跡」 群馬県企業局 1991
- 「柳久保遺跡群I」 前橋市教育委員会 1984
- 「芳賀東部团地遺跡I」 芳賀團地造成地内埋蔵文化財発掘調査団 1984
- 「丸山・北田下・中畠・村主・中山B」 群馬県教育委員会 1988
- 「西大室丸山遺跡」 群馬県教育委員会 1997
- 「諏訪西遺跡・諏訪東遺跡・柳久保遺跡」 群馬県教育委員会 1998
- 「荒砥北三木道遺跡II」 財群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 「上大屋・越後地区遺跡群」 大胡町教育委員会 1986
- 「上大屋南部地区遺跡群」 大胡町教育委員会 1999
- 「山王庵寺跡」 第7次 前橋市教育委員会 1982
- 「上野国分僧寺・尼寺中間地域」(2) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 「上野国分僧寺・尼寺中間地域」(5) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 「上大屋南部地区遺跡群」 群馬県勢多郡大胡町教育委員会 1999
- 「研究紀要」4 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 「研究紀要」7 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 「富田宮下遺跡」 現地説明会資料 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000
- 「埋文群馬」No.35 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000
- 「群馬県史」資料編3 群馬県史編纂委員会 1981

Tab. 7 土器觀察表

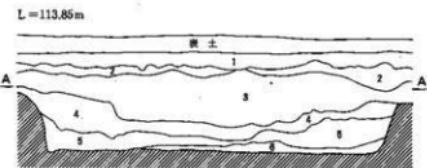
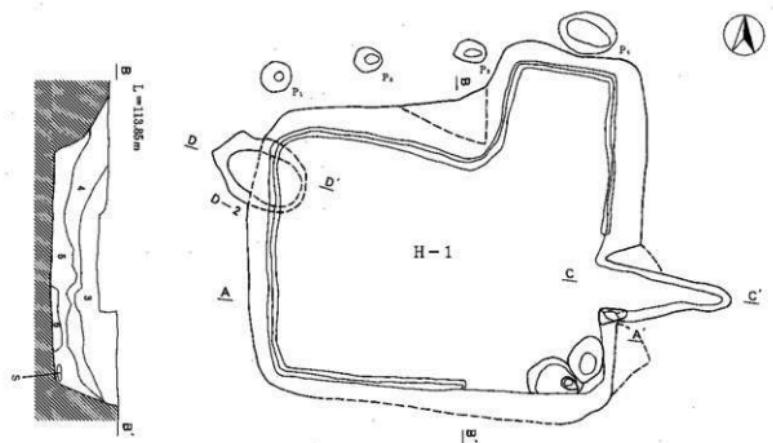
番号	出土位置	器形	登録番号	大きさ(cm)		地質	地成	色調	残存	形成方法の特徴	備考	Fig.	PL.
				口径	高さ								
1	H-1	須恵器 高台付瓶	1	14.0	5.1	細粒 白陶土 を含む。	良	灰褐色	4/5	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。底部下位に丸みを有し、口縁部は直線的外張する。当台はやや厚。		11	5
2	H-1	須恵器 片	2	12.7	3.9	細粒 紅	良	灰白色	一部 欠損	輪郭成形。底部手切り。体部は外側に張り出る。二段構成で、内側に張り出る。外縁部は直線的で、体部は弧形。底部は直線的外張する。当台はやや厚。		11	5
3	H-1	土器群 片	5	12.0	3.7	細粒	良	青褐色	2/3	輪郭成形。底部手切り。体部は外側に張り出る。内側に張り出る。外縁部は直線的で、体部は弧形。底部は直線的外張する。当台はやや厚。		11	5
4	H-1	土器群 片	4	14.7	3.8	細粒	良	にぼい 赤褐色	2/3	輪郭成形。底部手切り。内側に口縁部は直線的で、体部は弧形。内面には裏窓を有す。		11	5
5	H-1	縄文土器 深鉢	6	10.5	-	細粒 織目 を含む。	良	青褐色	底部 破片	縄文式。器底に凹凸のある文様が有り、内側に張り出る。外縁部は直線的で、体部は弧形。内面には裏窓を有す。		11	5
6	H-1	土器群 片	6	-	[120]	粗粒	良	にぼい 赤褐色	底部 破片	外縁部は直線的で、底部は弧形。内面には裏窓を有す。		11	5
7	H-1	土器群 片	7	-	-	細粒	良	別色 破片	外縁部は直線的で、下位施削部で、内面は裏窓で。「く」の字状の口縁を有す。器底は薄手。	-	5		
8	H-1	土器群 片	8	-	-	細粒	良	明るい 褐色	口縁部 破片	外縁部は直線的で、下位施削部で、内面は裏窓で。「く」の字状の口縁を有す。器底は薄手。	-	5	
9	H-3	須恵器 片	1	11.5	3.5	細粒	良	灰白色	ほぼ 完形	輪郭成形。底部手切り未開口。底辺部は斜面で、底部は弧形で、口縁部は直線的で、内面には裏窓を有す。		11	5
10	H-3	須恵器 片	2	12.5	4.1	細粒	良	灰白色	完形	輪郭成形。底部手切り未開口。体部は外側に張り出る。内側に張り出る。内面には裏窓を有す。		11	5
11	H-3	須恵器 片	3	14.4	5.0	細粒	良	にぼい 褐色	ほぼ 完形	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。底部は弧形で、内面には裏窓を有す。体部は直線的で内凹し、「く」の字状の口縁を有す。		11	5
12	H-3	灰陶器 高台付瓶	4	18.4	6.8	粗粒	良	灰白色	一部 欠損	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。底部は弧形で、内面には裏窓を有す。口縁部は直線的で、内面には裏窓を有す。		11	5
13	H-3	土器群 片	5	[195]	(195)	細粒	良	にぼい 黄褐色	1/3	輪郭成形。底部手切り未開口。内面には裏窓を有す。「く」の字状の口縁を有する。口縁部は直線的で、内面には裏窓を有す。		11	5
14	H-3	須恵器 大甕	6	-	[243]	粗粒	良	灰白色	頸部 破片	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。底部は弧形で、内面には裏窓を有す。		11	5
15	H-3	須恵器 高台付瓶	7	[140]	6.7	細粒	良	にぼい 黄褐色	1/4	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。底部は弧形で、内面には裏窓を有す。体部は直線的で立上がり、口縁部は直線的で外張する。		12	5
16	H-3	土器群 片	8	[183]	[7.3]	細粒	良	褐色	口縁部 破片	外縁部は直線的で、体部は弧形。底部は直線的で、内面には裏窓を有す。「く」の字状の口縁を有する。内面には裏窓を有す。		12	5
17	H-3	須恵器 須恵器 片	10	[125]	5.1	細粒	良	褐色	2/5	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。底部は弧形で、内面には裏窓を有す。「く」の字状の口縁を有する。内面には裏窓を有す。	-	5	
18	H-3	土器群 片	11	-	(8.2)	細粒	良	明るい 褐色	底部 破片	外縁部直面。内面には裏窓を有す。		5	
19	H-3	土器群 片	12	-	(1.9)	細粒	良	にぼい 褐色	底部 破片	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。底部は弧形で、内面には裏窓を有す。		5	
20	H-3	須恵器 須恵器 片	13	[190]	-	細粒	良	黄褐色	底部 破片	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。底部は弧形で、内面には裏窓を有す。		11	5
21	H-3	須恵器 須恵器 片	14	[140]	5.0	細粒	良	にぼい 黄褐色	1/3	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。底部は弧形で、内面には裏窓を有す。		12	5
22	H-3	須恵器 高台付瓶	15	[144]	(6.9)	細粒	良	灰白色	1/2 口縁部 欠損	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。底部は弧形で、内面には裏窓を有す。口縁部は直線的で立上がり。		12	5
23	H-3	須恵器 高台付瓶	16	[130]	8.4	細粒	良	灰白色	1/3	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。底部は弧形で、内面には裏窓を有す。口縁部は直線的で立上がり。		12	5
24	H-3	須恵器 片	17	[120]	4.0	細粒	良	灰白色	1/3	輪郭成形。底部手切り未開口。内面には裏窓を有す。体部は直線的に立上がり、口縁部は直線的に外張する。		12	5
25	H-3	須恵器 片	18	[132]	4.4	細粒	良	灰白色	1/6	輪郭成形。底部手切り未開口。内面には裏窓を有す。		12	5
26	H-3	須恵器 片	19	16.3	(6.5)	細粒	良	にぼい 褐色	1/2 底部 破片	輪郭成形。体部は直線的に立上がり、口縁部は直線的に外張する。		12	5
27	H-3	須恵器 高台付瓶	20	18.1	4.0	細粒	良	灰白色	2/4	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。やや厚れたものと並ぶ。高台は付ける高台。底部は直線的に立上がり、口縁部は直線的に外張する。		12	5
28	H-3	土器群 片	22	[138]	15.9	細粒	良	灰褐色	1/8	外縁部は直線的で、体部は弧形。内面には裏窓を有す。「く」の字状の口縁を有する。内面には裏窓を有す。		12	5
29	W-3	須恵器 須恵器 片	1	-	-	細粒	良	灰白色	底部 破片	輪郭成形。底部手切り未開口。		-	-
30	W-5	須恵器 片	1	-	-	細粒	良	薄 灰褐色	底部 破片	輪郭成形。底部手切り未開口。外縁部にカーブが有する。		-	-
31	D-1	須恵器 片	1	-	-	細粒	良	灰白色	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。底部は弧形で、内面には裏窓を有す。		-	-	
32	灰 陶	須恵器 片	1	-	-	細粒	良	灰 色	底部 破片	輪郭成形。底部手切り未開口。高台は付ける高台。底部は弧形で、内面には裏窓を有す。		12	6

Tab. 8 石器・石製品・鉄製品観察表

No.	遺物名	遺物	①最大長(cm)	②最大幅(cm)	③最大厚(cm)	④重さ(g)	⑤残存	⑥石材	登録番号	備考	Fig.
33	H-1	釘	①5.7	②0.9	③0.3	④4.8	⑤一部欠損		9		13
34	H-1	石製 鋸鋸車	①6.9	②4.0	③1.7	④38.6	⑤完形	⑥滑石	10		13
35	H-1	敲石	①14.0	②6.5	③3.5	④605.0	⑤完形	⑥粗粒 安山岩	11		13
36	H-1	石皿	①10.3	②9.7	③4.5	④274.0	⑤完形	⑥粗粒 安山岩	12		13
37	H-3	刀子	①12.3	②1.2	③0.4	④15.0	⑤一部欠損		23		13
38	H-3	刀子	①8.4	②1.1	③0.3	④16.8	⑤一部欠損		24		13
39	H-3	磨石	①12.6	②11.2	③3.9	④869.0	⑤完形	⑥粗粒 安山岩	25		13
40	H-3	鉗	①4.5	②3.9	③2.5	④74.0	⑤完形	⑥粗粒 安山岩	26		—
41	H-4	羽口	①(5.5)	②(7.0)	③(3.8)	④125.0	⑤破片		1		13
42	H-4	羽口	①(6.0)	②(6.7)	③(6.0)	④130.0	⑤破片		2		13
43	H-4	羽口	①(7.2)	②(3.5)	③(3.7)	④65.5	⑤破片		3		—
44	H-4	羽口	①6.5	②(4.7)	③(2.2)	④41.8	⑤破片		4		—
45	B-3	磨石	①14.0	②6.4	③3.9	④670.0	⑤完形	⑥粗粒 安山岩	1		14
46	P-7	削器	①6.8	②6.8	③1.0	④18.0	⑤ねじれ完形	⑥黒色頁岩	1		13
47	W-3	釘	①3.9	②0.4	③0.4	④2.7	⑤一部欠損		2		13
48	X103 Y103G	石皿	①23.0	②19.3	③6.2	④2000.0	⑤一部欠損	⑥粗粒 安山岩	1		14
49	表 探	打製石斧	①15.5	②6.4	③3.8	④430.0	⑤一部欠損	⑥黒色頁岩	2	短柄型石斧	14
50	表 探	打製石斧	①10.0	②6.8	③1.7	④110.0	⑤完形	⑥頁岩	3	握型石斧	14

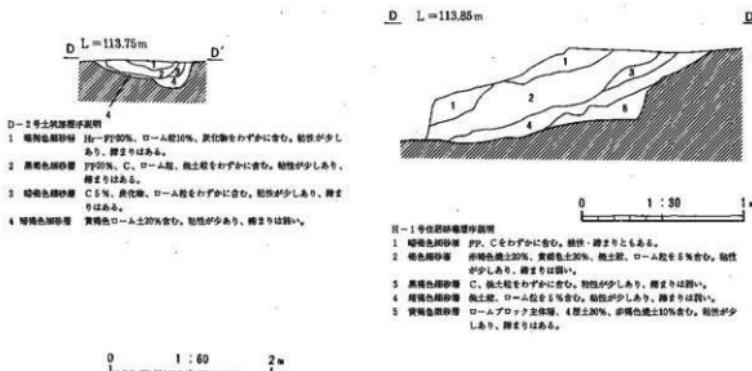
(註)

- 縄文土器・土師器・須恵器の観察項目は「①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存」の順で記載した。
- ①胎土は細粒（0.9mm以下）、中流（1.0～1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物等が入る場合には、それを記載した。
- ②焼成は、「極良・良・不良」の3段階で評価した。
- ③色調は土器外部を観察し、色名は新版標準土色帖2002年版（監修：農林水産省水産技術会議事務局・色票監修：財日本色彩研究所）によった。
- 大きさの単位は「cm」・「g」である。現存地を（ ）、復原値を〔 〕で示した。その他小片については、所属部位を記載した。
- 石器・石製品の観察項目は「①最大長 ②最大幅 ③最大厚 ④重さ ⑤石材」の順で記載した。



H-1号地断面図

- 褐色色用砂層 土質±10%, H-PP, 素土をわずかに含む。粘性が少しあり、締まりは弱い。
- 褐色色砂層 黄褐色±20%, Hr-PP, 素土を含む。粘性・締まりともある。
- 黒褐色細砂層 PP±20%, As-C±5%, 黄褐色±5%含む。粘性・締まりともある。
- 黒褐色細砂層 As-C, ローム混、黄褐色±10%, Hr-PP, ロームブロック ($\phi=5-35cm$) を5%含む。粘性が少しあり、締まりは弱い。
- 褐色細砂層 As-C, ローム混5%, ロームブロック ($\phi=5-60cm$) を10%含む。粘性が少しあり、締まりは弱い。
- 黒褐色細砂層 ローム混、ロームブロック ($\phi=5-10cm$) を5%含む。黄褐色±10%含む。粘性があり、締まりは弱い。

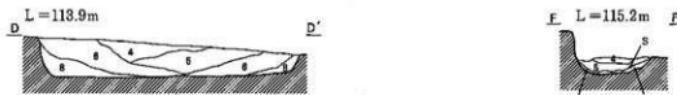
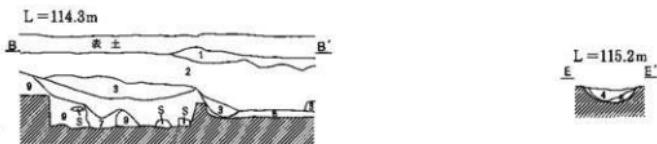
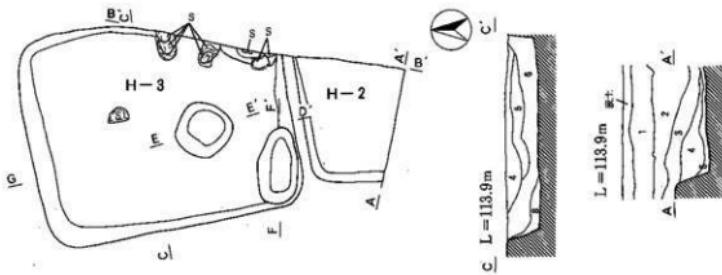


D-D'号地断面図

- 褐色色用砂層 Hr-PP±20%, ローム混10%, 腐化物をわずかに含む。粘性が少しあり、締まりはある。
- 黒褐色細砂層 PP細粒、C, ローム混、素土を含む。粘性が少しあり、締まりはある。
- 褐色色細砂層 C±5%, 腐化物、ローム混をわずかに含む。粘性が少しあり、締まりはある。
- 黒褐色細砂層 黄褐色ローム±20%含む。粘性が少しあり、締まりは弱い。

- 褐色色用砂層 PP, Cをわずかに含む。粘性・締まりともある。
- 褐色色砂層 黄褐色±20%, 黄褐色±20%, 素土混、ローム混を5%含む。粘性が少しあり、締まりは弱い。
- 黒褐色細砂層 C, 素土混をわずかに含む。粘性が少しあり、締まりは弱い。
- 褐色色細砂層 C, 素土混、ローム混を5%含む。粘性が少しあり、締まりは弱い。
- 黒褐色細砂層 ロームブロック主体層、C素土20%, 黑褐色±10%含む。粘性があり、締まりはある。

Fig. 6 H-1 住居跡

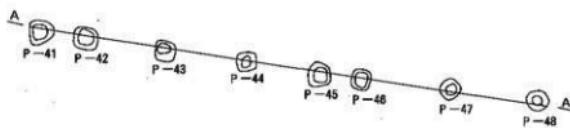


H-2号住居跡序番号

- 1 黒褐色細砂層 $As = C - 5\%$, $Hr - PP 5\%$, $D - A$ 約 10%, 水化物をわずかに含む。粘性がなく、堅く握まる。
- 2 黒褐色細砂層 $As = C - 20\%$, $Hr - PP 10\%$, $D - A$ 約 10%, 地下水, 水化物をわずかに含む。粘性が少しもあり、握まりはある。
- 3 黒褐色細砂層 $As = C - 10\%$, $Hr - PP$, ローム粘 5%, 地下水, 水化物をわずかに含む。粘性が少しもあり、握まりはある。
- 4 黒褐色細砂層 $As = C - 5\%$, $Hr - PP$, ローム粘をわずかに含む。粘性・握まりともある。
- 5 黑褐色細砂層 黒褐色土を20%含む。粘性があり、握まりは弱い。

H-3号住居跡序番号

- 1 黒褐色細砂層 $As = C - 5\%$, ローム粘 10%, 水化物をわずかに含む。粘性がなく、堅く握る。
- 2 黑褐色細砂層 $As = C - 10\%$, $Hr - PP 10\%$, $D - A$ 約 10%, 水化物をわずかに含む。粘性が少しもあり、握まりはある。
- 3 黑褐色細砂層 $As = C - 10\%$, $Hr - PP$, ローム粘 5%, 地下水, 水化物をわずかに含む。粘性が少しもあり、握まりはある。
- 4 黑褐色細砂層 $As = C$, $Hr - PP 5\%$, ローム粘 50%, ロームブロック ($\phi = 5 \sim 10m$) 5%, 地下水, 水化物をわずかに含む。粘性が少しもあり、握まりは弱い。
- 5 黑褐色細砂層 $As = C - 5\%$, $Hr - PP 5\%$, ロームブロック ($\phi = 5 \sim 10m$) 5%, 水化物をわずかに含む。粘性・握まりともある。
- 6 黑褐色細砂層 $As = C - 5\%$, $Hr - PP 5\%$, ローム粘 10%, 水化物を含む。粘性・握まりともある。
- 7 黑褐色細砂層 地下ブロック ($\phi = 5 \sim 20m$) 10%, ロームブロック ($\phi = 5 \sim 10m$) 5%, 地下水, 水化物をわずかに含む。粘性があり、握まりは弱い。
- 8 黑褐色細砂層 地下土を50%含む。ローム主張層。粘性があり、握まりは弱い。
- 9 黑褐色細砂層 ソフトローム層 (南方)。粘性が少しあり、握まりはある。



0 1 : 60 2 m

Fig. 7 H-2・3住居跡、P-41~48ピット

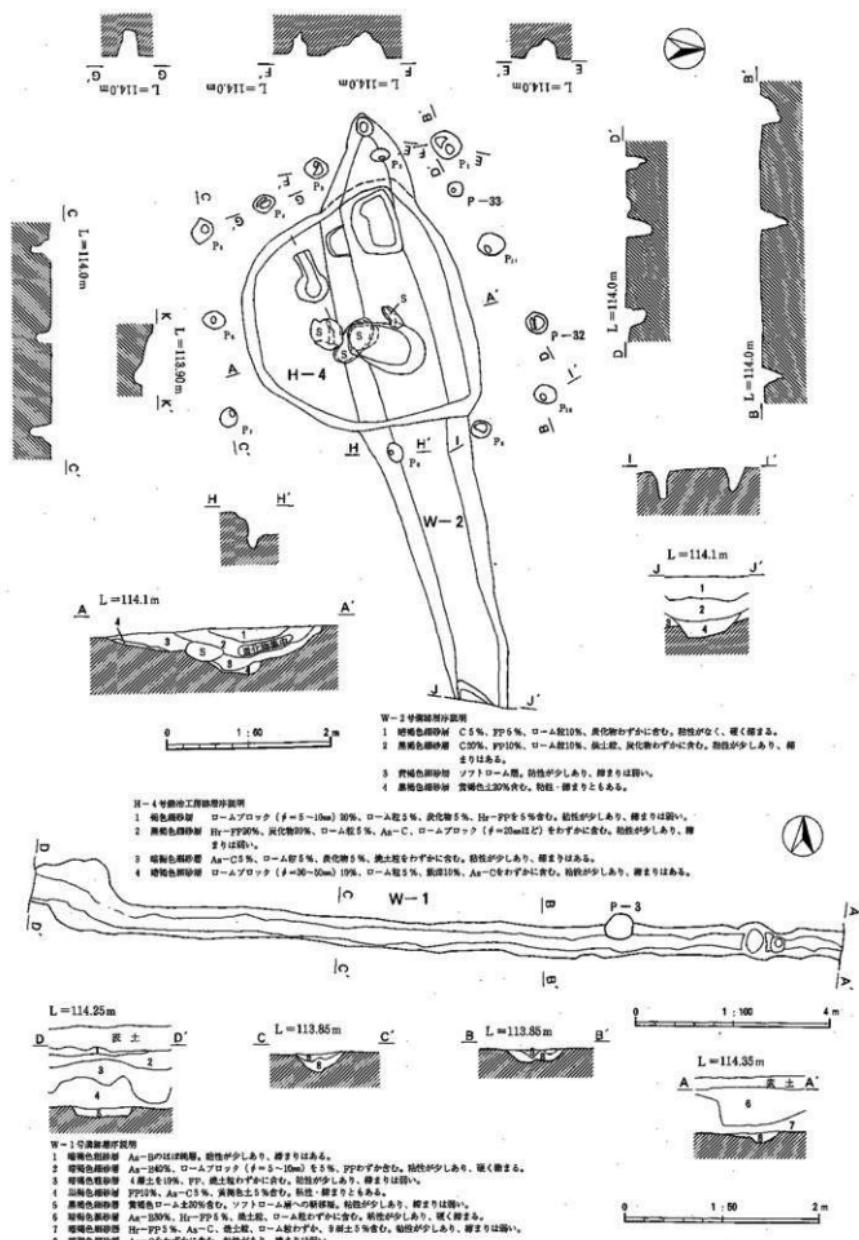


Fig. 8 H-4号鉱床工房跡 W-1・2溝跡

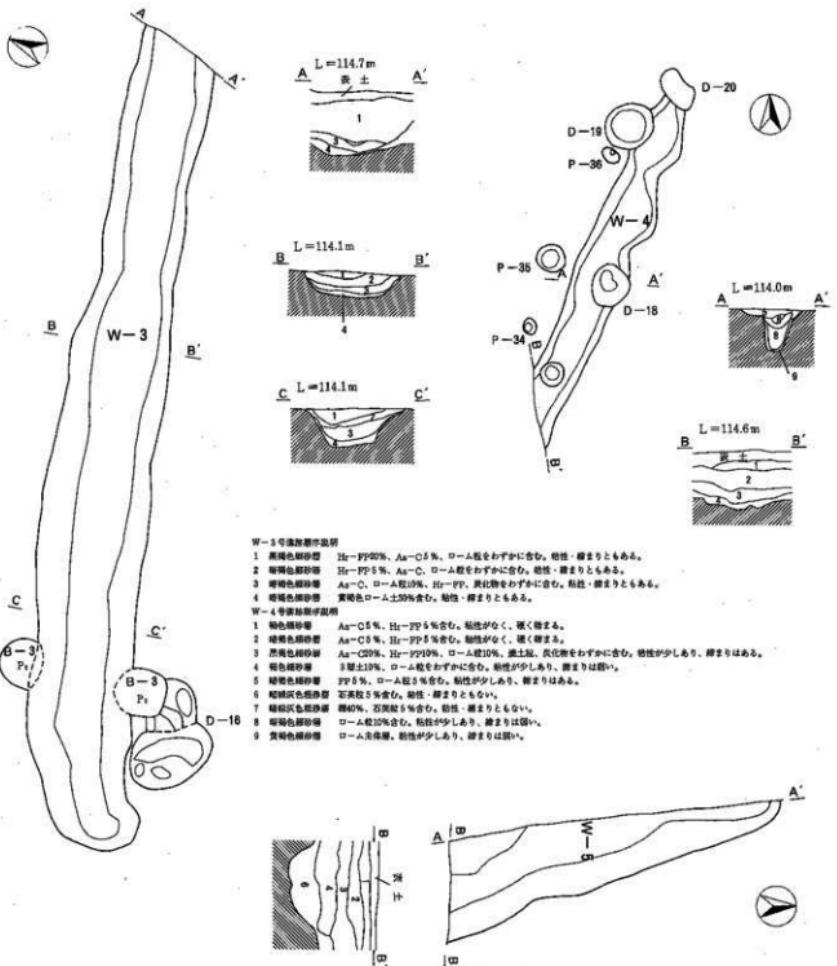
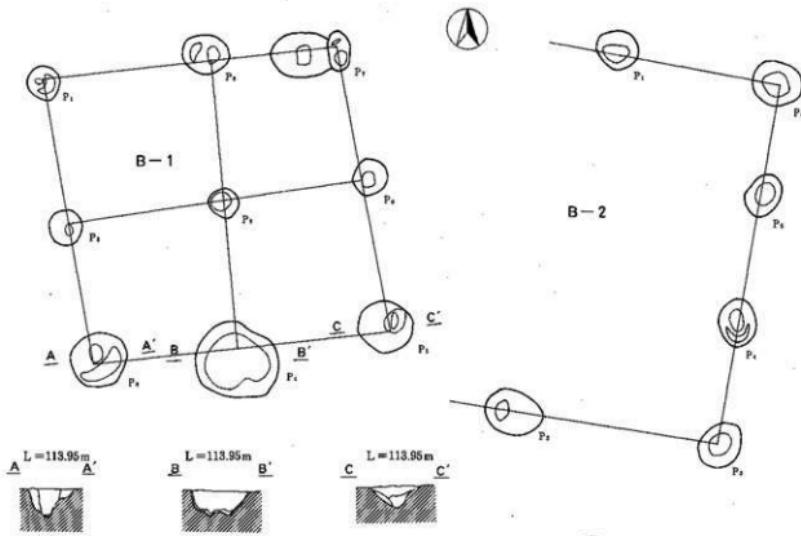
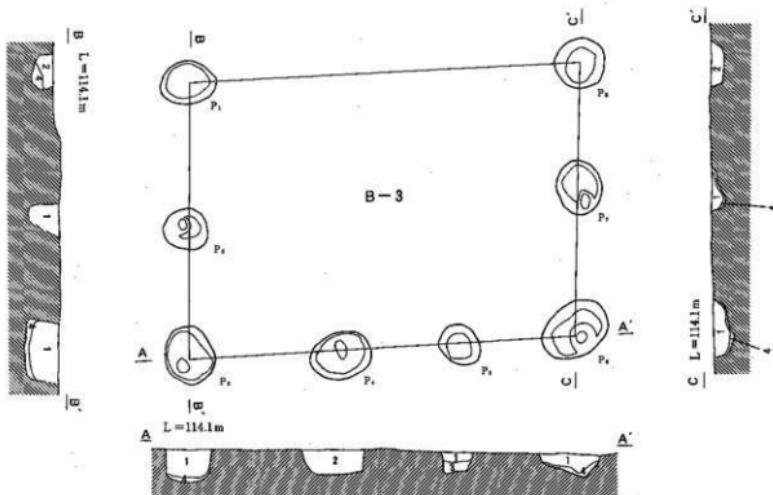


Fig. 9 W-3・4・5溝跡



B-1 今根立柱建物跡序実測
 1 黒褐色細砂層 PP10%、C3%、ロームをわずかに含む。粘性が少しあり、堅まりはある。
 2 黄褐色細砂層 As-Cをわずかに含む。粘性が少しあり、堅まりはない。
 3 黄褐色層 粘性が少しあり、堅まりはある。



B-2 今根立柱建物跡序実測
 1 黒褐色細砂層 As-C10%、Hr-PP10%、ロームブロック (幅10~20mm) 5%、黄褐色ローム土20%含む。
 2 黄褐色細砂層 As-C10%、Hr-PP20%、黄褐色ローム土20%含む。
 3 黄褐色層 As-C5%、ローム10%、ロームブロック (幅10~20mm) 5%、黄褐色ローム土20%含む。
 4 黄褐色細砂層 ローム主層。

0 1 : 60 2 m

Fig.10 B-1・2・3 握立柱建物跡

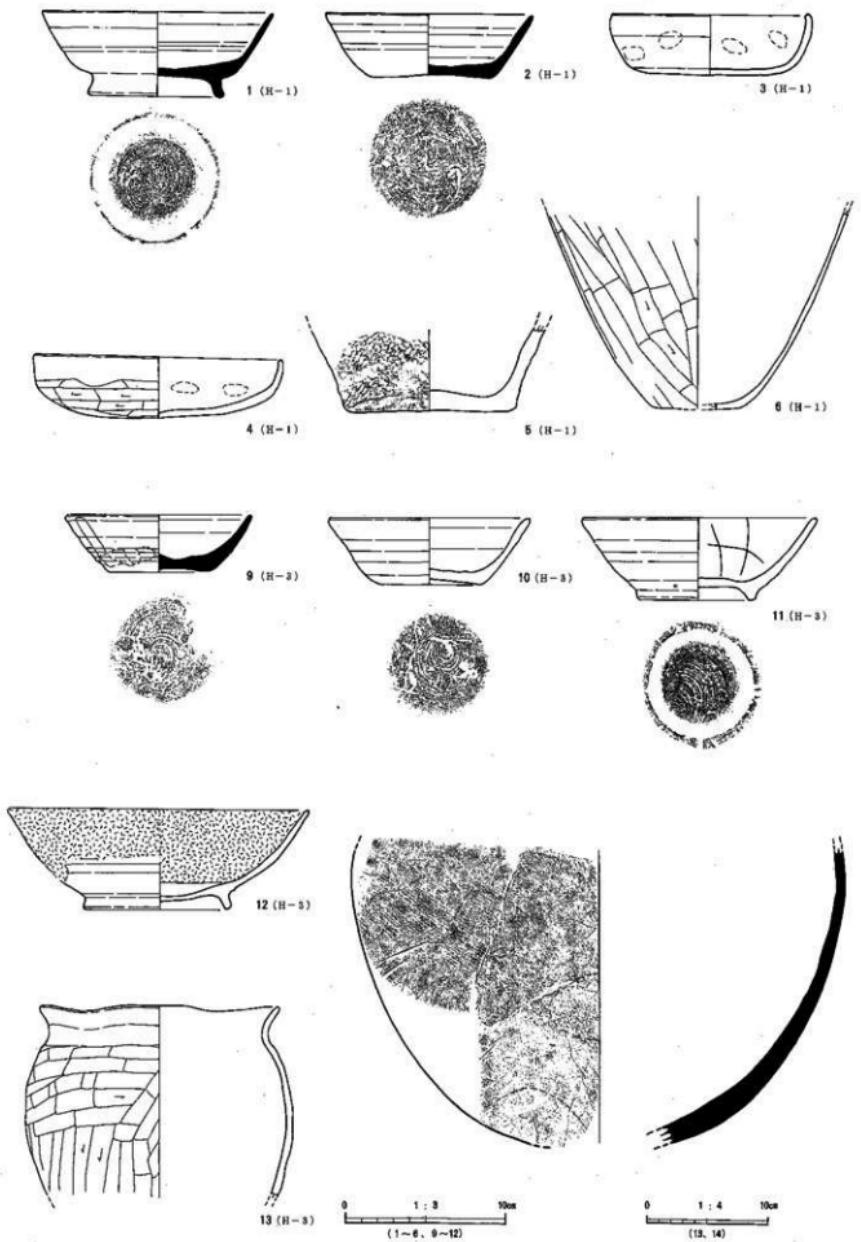


Fig.11 H-1・3号住居跡出土の土器

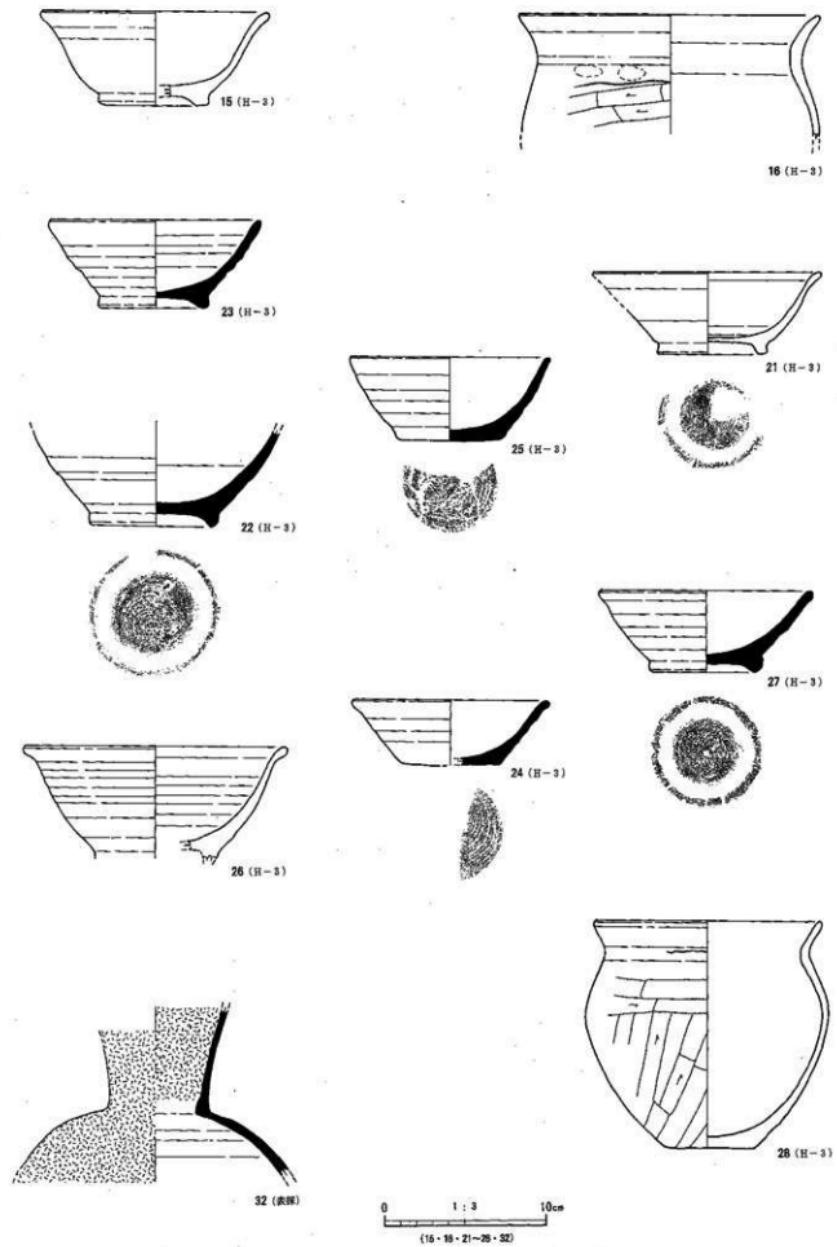


Fig.12 H-3号住居跡出土、調査区表面採取の土器

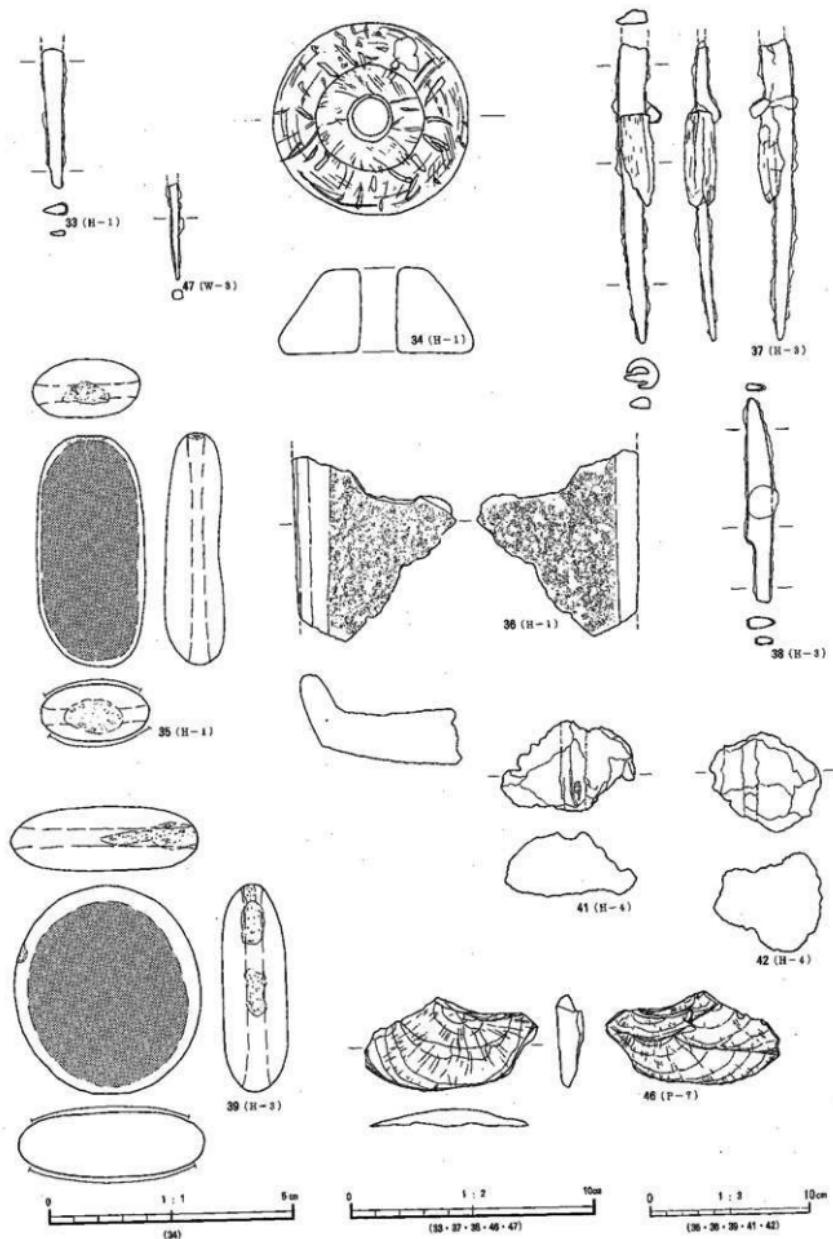
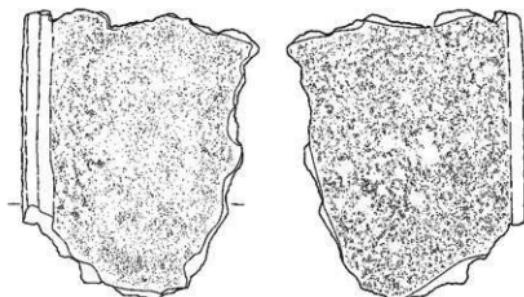
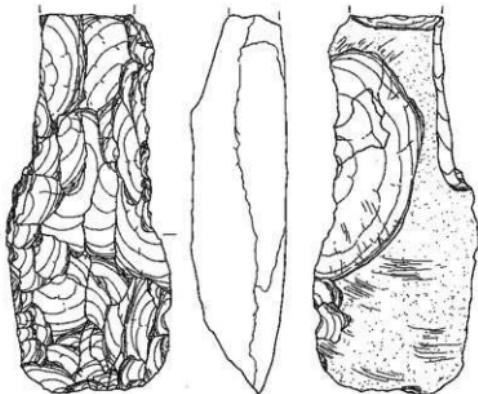


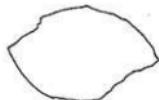
Fig.13 H-1・3・4号住居跡、W-3号溝跡、P-7ピットの出土遺物



48 (X108Y103G)



49 (表面)



49 (表面)



50 (表面)

0 1 : 4 10m
(48)

0 1 : 3 10cm
(45)

0 1 : 2 10cm
(49 - 50)

Fig.14 B-3号柱立柱建物跡出土、調査区グリッド採取・表面採取の遺物



1 堤沼西遺跡A区（西から）



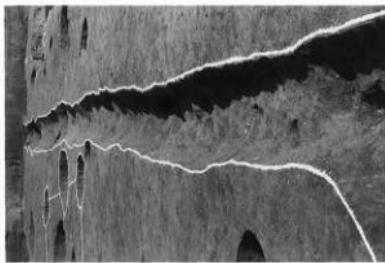
2 A区H-1号住居跡（南から）



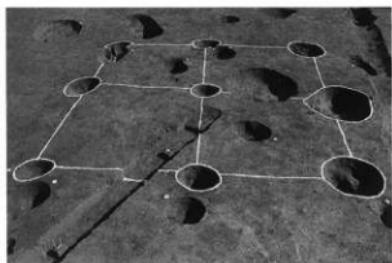
3 A区H-1号住居跡（西から）



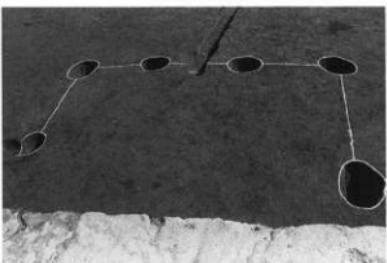
3 A区H-1号石製纺錐車出土状態（西から）



4 A区W-1号窯跡（西から）



6 A区B-1号掘立柱建物遺構跡（西から）



7 A区B-2号掘立柱建物遺構跡（西から）



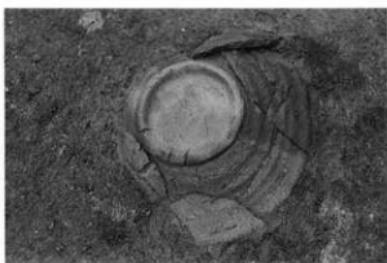
8 B区H-3号住居跡（西から）



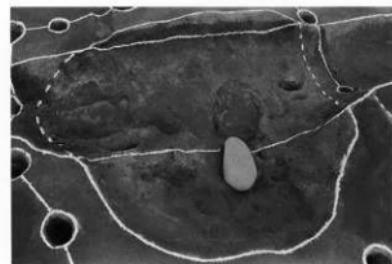
9 B区H-3号住居跡出土状態（西から）



10 B区H-3号住居跡遺物出土状態（北から）



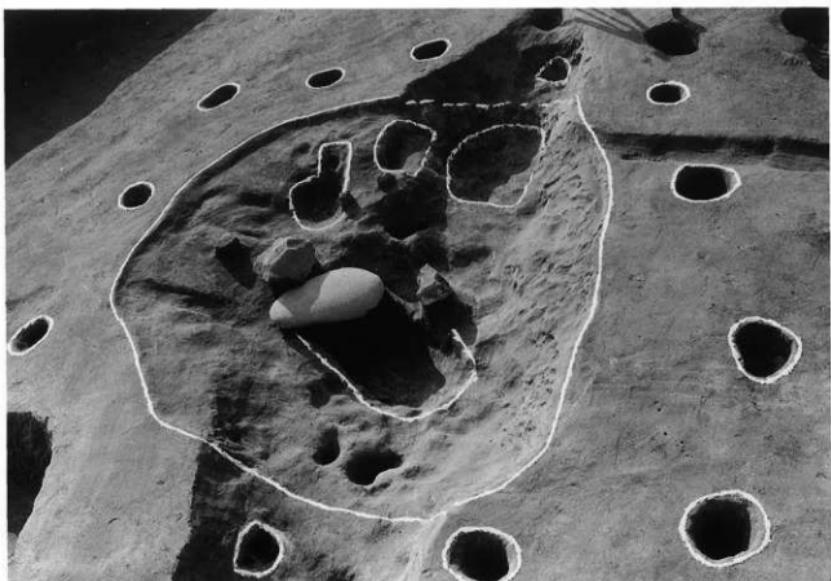
11 B区H-3号住居跡遺物出土状態（南から）



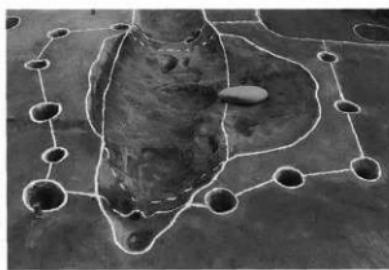
12 B区H-4号鍛冶工房跡（南から）



13 B区H-4号鍛冶工房跡遺物出土状態（北東から）



14 B区H-4号微治工跡（北東から）



15 B区H-4号住居跡・W-2号溝跡重複状態（西から）



16 B区W-2号溝跡（西から）



17 D区W-3号溝跡（北西から）



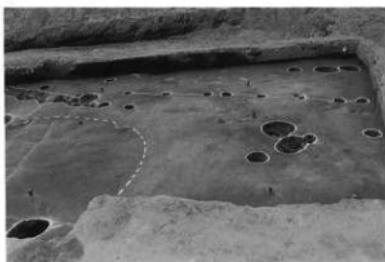
18 B区W-4号溝跡（南から）



19 B区B-3号柱立柱建物遺構跡（北から）



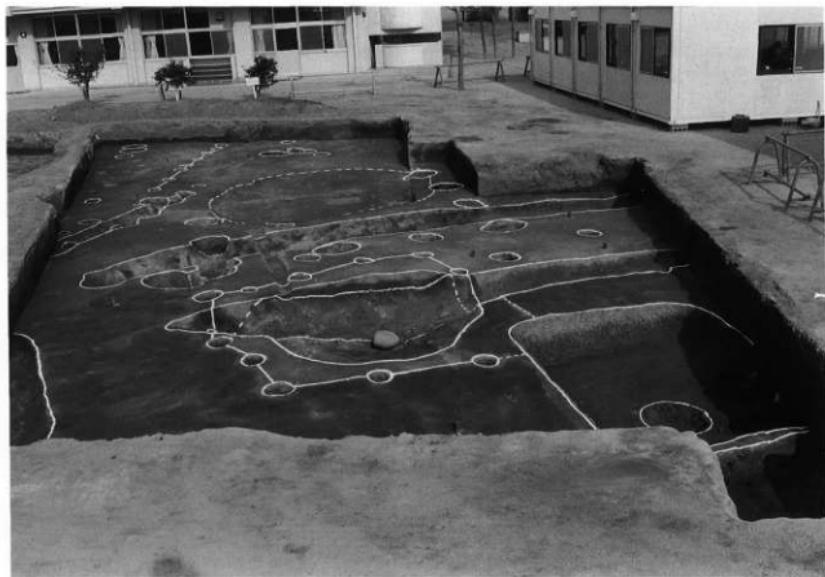
20 B区P-41~48号ピット（南から）



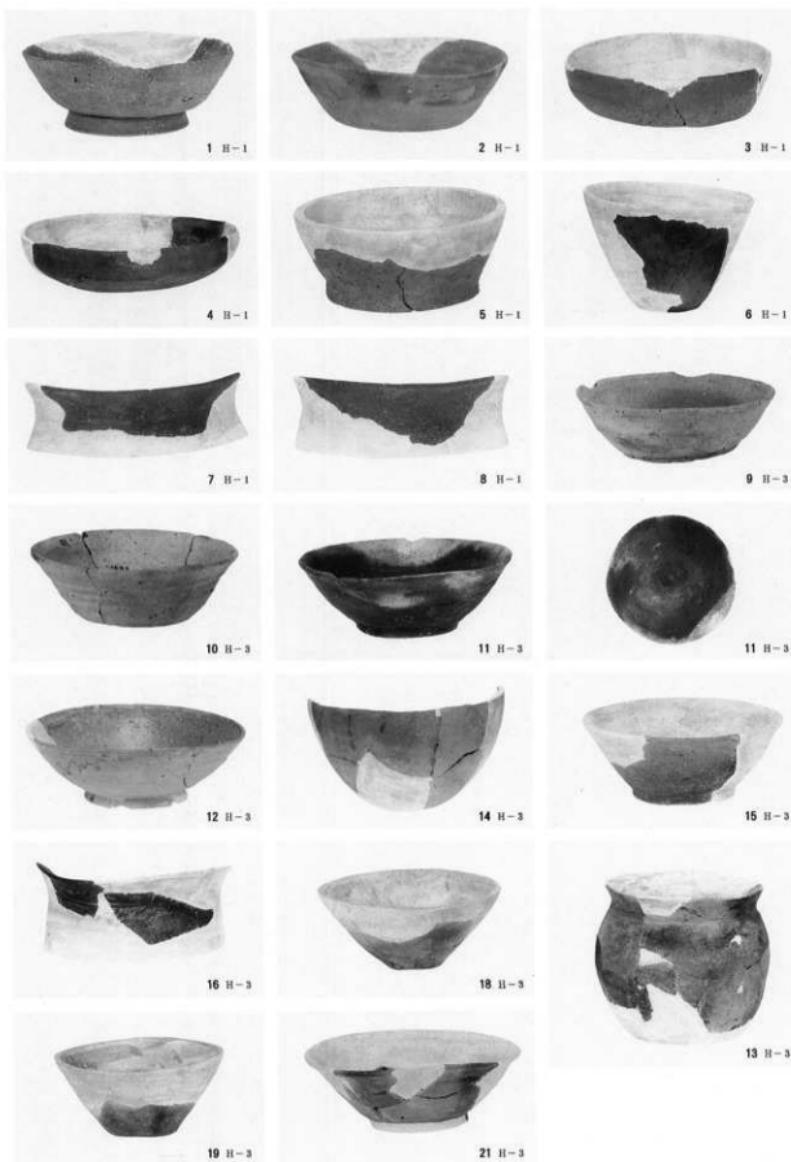
21 B区北側土坑群（東から）



22 堤沼西遺跡B区（北から）



23 堤沼西遺跡B区（南から）





22 H - 3



23 H - 3



24 H - 3



26 H - 3



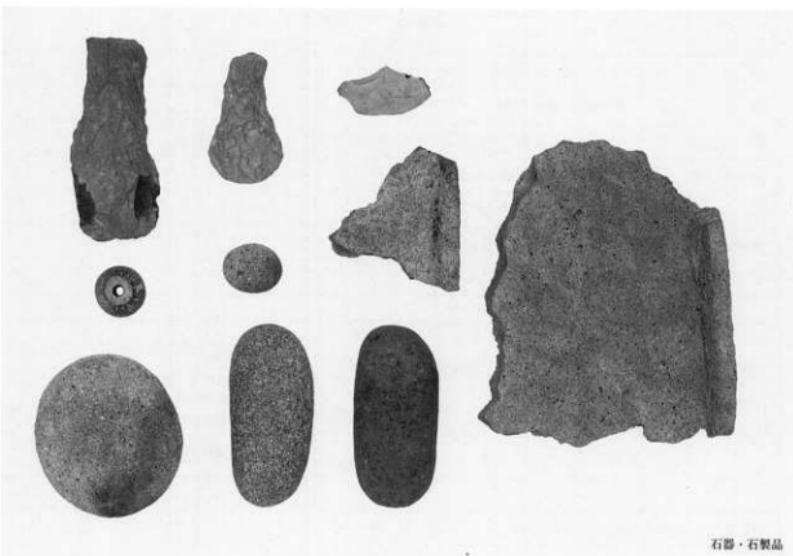
27 H - 3



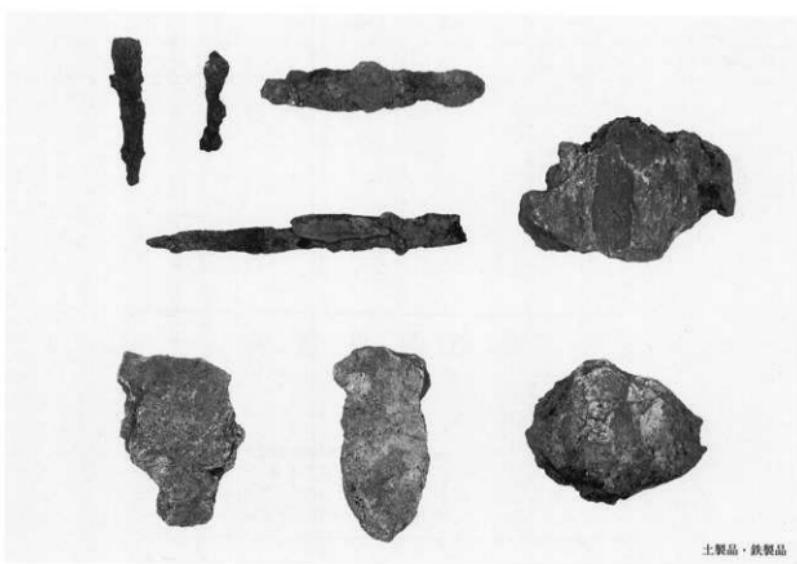
28 H - 3



32 H - 3



石器・石製品



土製品・鐵製品

抄 錄

フリガナ	ツツミヌマニシサンイセキ
書名	堤沼西Ⅲ遺跡
副書名	前橋市立桂董東小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	平野 岳志・小林 和美
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三俣町二丁目10-2
発行年月日	平成15年3月15日

フリガナ 所収遺物名	フリガナ 所 在 地	コード		位 置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 經			
ツツミヌマニシサンイセキ 堤沼西Ⅲ遺跡	マエバシツツミマチ 前橋市堤町 450番地の2	10201	14D 3	世界測地系 35° 25' 51" N 日本測地系 35° 25' 50" N	世界測地系 139° 06' 45" E 日本測地系 139° 06' 46" E	20021009 から 20021119	510m ²	小学校 校舎増築

所収遺跡名	種 别	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物
堤沼西Ⅲ遺跡	集落跡	奈良・ 平安時代	住居跡3軒、鍛冶工房跡1軒 掘立柱建物跡3棟、溝跡5条、 土坑24基、ピット48基	土師器、須恵器、石器、石製品、鉄製品
特記事項				

堤沼西Ⅲ遺跡

2003年3月15日 印刷
2003年3月15日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市三俣町二丁目10-2
TEL 027-231-9531
印刷所 松本印刷工業株式会社